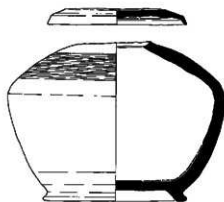


多久遺跡群

前原IC地区A産業団地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

前原市文化財調査報告書

第 99 集



多久遺跡暫口地点1号火葬墓出土骨甕部

2008

前原市教育委員会

多久遺跡群

前原IC地区A産業団地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

前原市文化財調査報告書

第 99 集

2008

前原市教育委員会



開発前の前原IC周辺航空写真 西から福岡市方面を望む (写真提供：森島新聞社 2005年撮影) ※転載不可



2-1 D地点1号火葬墓(南から)



2-2 D地点1・2号火葬墓骨蔵器

序

前原市は人口約7万人、面積104.50km²の街で、背振山系北麓の平野には美しい田園風景が広がっています。近年では福岡市西隣のベッドタウンとして国道沿いの市街化が進み、加えて九州大学伊都キャンパスが本格始動しはじめた現在、本市も産・官・学が一体となって「学研都市」としての新たなまちづくりに取り組んでおります。また、市を横断する西九州自動車道の前原インターチェンジ付近を中心として、積極的な企業誘致活動を進めており、この度の多久遺跡群の発掘調査も、この産業団地整備の第一弾であるA産業団地整備事業に伴い実施したものであります。

多久遺跡群周辺からは、これまでに6世紀代の前方後円墳を含む古墳群や奈良時代の集落や製鉄遺構、中世の火葬土坑等が見つかっております。今回ここに報告いたします丘陵からは、奈良時代の火葬墓群が発見されました。当時の葬送の変遷や集落構造を探る上で大きな手がかりとなるものと思われます。本書がこの地域における歴史の解明の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり地元の皆様及び前原市土地開発公社、清水建設株式会社の方々には多大なるご理解・ご協力を賜りました。心より御礼申し上げます。

平成20年3月31日

前原市教育委員会
教育長 中原一憲

例言

1. 本書は前原市大字多久・富地内における前原IC地区A産業団地整備事業に伴い、前原市土地開発公社より受託し、平成18年度に前原市教育委員会が実施した発掘調査の記録である。
2. 遺構の実測は楢崎直子が行った。
3. 遺構の写真撮影は空中写真を九州航空株式会社に委託し、その他は楢崎が撮影した。
4. 遺物の復元は藤森啓子、柏田睦子、和多治子が、実測は楢崎が、裂図は友池真由美、末益真奈美が行った。
5. 遺物の写真撮影は楢崎が行った。
6. 本書に掲載した遺構及び全体図で使用した座標は、国土調査法第Ⅱ座標系に則っている。また方位は磁北を示している。
7. 遺物・実測図・写真は伊都国歴史博物館で管理・保管している。
8. 本書の執筆・編集は楢崎が行った。

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
第Ⅱ章	位置と環境	2
第Ⅲ章	調査の概要	
1.	A地点の調査	
1)	調査の概要	5
2)	遺構と遺物	5
2.	C地点の調査	
1)	調査の概要	7
2)	遺構	7
3.	D地点の調査	
1)	調査の概要	8
2)	遺物と遺構	9
①	1号火葬墓	9
②	2号火葬墓	12
③	3号火葬墓	13
④	1号土坑	14
⑤	2号土坑	14
⑥	1号火葬墓周辺出土鉄洋	15
第Ⅳ章	まとめ	17

挿図目次

第1図	多久遺跡群の位置及び周辺の遺跡分布図 (1/50,000)	3
第2図	遺跡周辺の地形及び調査地点 (1/4,500)	4
第3図	出土遺物実測図 (1/3)	5
第4図	A地点全体図 (1/150)	6
第5図	C地点全体図 (1/150)	7
第6図	D地点全体図 (1/250)	8
第7図	1号火葬墓実測図 (1/15)	10
第8図	1号火葬墓骨蔵器実測図 (1/3)	11
第9図	2号火葬墓実測図 (1/8)	12
第10図	2号火葬墓骨蔵器実測図 (1/3)	12
第11図	3号火葬墓実測図 (1/8)	13

第12図	3号火葬墓骨蔵器実測図 (1/3)	13
第13図	1号土坑実測図 (1/60)	14
第14図	2号土坑実測図 (1/8)	14
第15図	2号土坑出土土器実測図 (1/3)	14
第16図	鉄滓構成図 (1/3)	15
第17図	鉄滓実測図 (1/2)	16
第18図	奈良尾遺跡出土埴弘実測図 (1/1)	18
表 1	市内火葬墓出土例	17

図版目次

巻頭図版 1	開発前の前原IC周辺航空写真	図版 9 - 1	D地点1号火葬墓骨蔵器①
巻頭図版 2 - 1	D地点1号火葬墓	図版 9 - 2	D地点1号火葬墓骨蔵器①蓋
巻頭図版 2 - 2	D地点1・2号火葬墓骨蔵器	図版 9 - 3	D地点1号火葬墓骨蔵器①身
図版 1 - 1	多久遺跡群遠景 (北から)	図版 9 - 4	D地点1号火葬墓骨蔵器②
図版 1 - 2	多久遺跡群遠景 (南から)	図版 9 - 5	D地点1号火葬墓骨蔵器②蓋
図版 2 - 1	A地点全景 (東から)	図版 9 - 6	D地点1号火葬墓骨蔵器②身
図版 2 - 2	A地点東側築石 (東から)	図版10 - 1	D地点1号火葬墓骨蔵器③
図版 3 - 1	C地点全景 (南から)	図版10 - 2	D地点1号火葬墓骨蔵器③蓋
図版 3 - 2	拡張後のD地点遠景 (南から)	図版10 - 3	D地点1号火葬墓骨蔵器③身
図版 4 - 1	D地点からの眺望 (北から)	図版10 - 4	D地点1号火葬墓骨蔵器④
図版 4 - 2	1・2号火葬墓検出状況 (南から)	図版10 - 5	D地点1号火葬墓骨蔵器④蓋
図版 5 - 1	1号火葬墓検出状況 (南から)	図版10 - 6	D地点1号火葬墓骨蔵器④身
図版 5 - 2	1号火葬墓骨蔵器出土状況 (北東から)	図版11 - 1	D地点2号火葬墓骨蔵器
図版 6 - 1	1号火葬墓骨蔵器出土状況 (東から)	図版11 - 2	D地点2号火葬墓骨蔵器 蓋
図版 6 - 2	1号火葬墓床石検出状況 (南から)	図版11 - 3	D地点2号火葬墓骨蔵器 身
図版 7 - 1	2号火葬墓 (南から)	図版11 - 4	D地点3号火葬墓骨蔵器
図版 7 - 2	3号火葬墓 (東から)	図版11 - 5	D地点2号土坑出土土器
図版 8 - 1	2号土坑 (南から)	図版11 - 6	D地点1号火葬墓骨蔵器②火葬骨
図版 8 - 2	造成進むD地点 (南から)	図版12	D地点1号火葬墓周辺出土鉄滓

第I章 はじめに

1. 調査に至る経緯

近年、福岡市西区元岡・桑原地区における九州大学伊都キャンパスの開校に伴い、前原市においても北部の泊地区および西九州自動車道前原IC周辺地区を中心に、企業誘致を核とする新たな産業の創出の動きが活発になっている。このような状況の中で、平成17年5月26日、前原市九州大学移転まちづくり室（当時）より、産業団地整備計画のある西九州自動車道前原IC南側丘陵における文化財所在の有無の照会文書が文化課へ提出された。これを受け、当地は周知の埋蔵文化財包蔵地外であったが、近くに多久口木古墳群等が存在することから同年7月に現地踏査を実施、平成18年5月24日に前原市土地開発公社と発掘調査の契約を締結し、古墳及び遺構が存在する可能性のある尾根線上及び谷部を対象に、伐採等準備の整った場所から順次試掘調査を行った。そのうち、遺構が確認された尾根線上に位置するA・C・D地点の約930mについて平成19年1月中旬より本調査を実施した。

2. 調査の組織

多久遺跡群の発掘調査及び整理作業における関係機関は以下の通りである。

工事主体者：前原市土地開発公社
理事長 中田 直喜

施工業者：清水建設株式会社
担当者 田崎 宗春

調査主体者：前原市教育委員会

		平成18年度：発掘調査	平成19年度：整理作業
総括	教育長	菊竹 利嗣	中原 一憲
	教育部長	三嶋 俊蔵（～平成18年9月） 坂巻 善直（平成18年10月～）	坂巻 善直
	文化課長	鬼木 武信（～平成18年12月） 久保 静代（平成19年1月～）	久保 静代
	同課長補佐	久保 静代（～平成18年12月）	
	同文化財係長	角 浩行	同発掘調査係長 角 浩行
庶務	同 主事	大久保 二葉	矢野 真司
調査	同 主事	植崎 直子	植崎 直子

本調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々にご指導賜りました。心より御礼申し上げます。

西谷正、小田富士雄、狹川真一、中島恒次郎、吉澤悟、穴澤義功、下原幸裕（順不同・敬称略）

第Ⅱ章 位置と環境

多久遺跡群は前原市中心部から南へ2kmの地点に広がり、雷山川と長野川に挟まれた低丘陵地である。今回の調査区は、雷山大溜池を水源とする小河川である多久川の西岸に位置する標高49mの丘陵地である。当地周辺では1980年代後半から開発が進み、荻浦地区・大浦地区で土地区画整理が実施されたほか、本調査区南側にザ・クイーンズヒルゴルフ場が、北側に西九州自動車道及び前原インターチェンジが建設され、現在では前原市と福岡市を結ぶ交通の要衝であり、今後の産業創出の拠点として期待されている地点である。

周辺ではこれまでに数箇所の発掘調査が実施されている。事例としては多くはないが、徐々に集落構造が判明しているもので以下に紹介する。

井ノ浦古墳は本丘陵の谷を挟んで南に位置する丘陵上、標高69mの地点に位置する5世紀末～6世紀前半の円墳である。単室・片袖の石室を有する竪穴系横口式石室で、溝溝からは朝鮮半島系の広口短頸壺が出土している。辻ノ田古墳群では井ノ浦古墳と同丘陵上だが尾根を遡って位置するもので、6世紀前半～7世紀前半に築造された3基の円墳が確認されている。それぞれの石室から須恵器、鉄器、装身具等が出土している。また1号墳墳丘上からは朝鮮半島系の土器を模倣したと推測される土師質の蓋が2点出土している。多久口木古墳群は現在の前原料金所所在地である。3基の古墳が存在し、円墳である1・2号墳が発掘調査されている。1号墳は6世紀後半～末のもので径15m～を測り、複室構造の横穴式石室を有する。2号墳は6世紀前半～末のもので径10m～である。破壊され残存状況は悪いが雑葉形杵葉などが出土している。3号墳は勝善院敷地内に現存する前方後円墳で、詳細は不明であるが全長約15mである。多久元多久遺跡では弥生時代前～中期の土器を多く含む包含層及び、火葬土坑1基が検出されている。多久柿原遺跡Ⅰ地区ではいわゆる松菊里型住居跡が検出された。残存状況は悪いが市内で唯一の検出例である。多久元多久遺跡の包含層の状況からも、弥生時代の集落が広がっていたものと考えられる。現在の前原インターチェンジ帯にあたる奈良尾遺跡からは、弥生時代の甕棺墓群、奈良時代の集落跡、鍛冶関連遺構、戦国時代の火葬土坑等墓群が検出された。また、当地における仏教の浸透をうかがわせる貴重な資料といえる白鳳期の埴仏片が整地層より出土している。

なお、本調査区とは多久川を挟んで東に対峙する低丘陵地に位置する上籙子遺跡では、掘建柱建物跡や鍛冶関連遺構などが見つかり、標高約20mの丘陵上に奈良時代の集落跡が展開していたことが明らかとなった。また多久川を挟み北に位置する標高70mの独立丘陵に広がる荻浦遺跡や大浦遺跡群でも8世紀の火葬墓が検出されており、多久川を取り巻く周辺地域における奈良時代の集落構造がだんだんと明らかになってきている。

(参考文献)

- 『大浦遺跡群発掘調査概報』前原町文化財調査報告書第26集 前原町教育委員会 1987年
- 『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ』前原町文化財調査報告書第38集 前原町教育委員会 1992年
- 『奈良尾遺跡』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第13集 福岡県教育委員会 1991年
- 『井ノ浦古墳・辻ノ田古墳群』前原市文化財調査報告書第53集 前原市教育委員会 1994年
- 『多久川流域の遺跡群』前原市文化財調査報告書第79集 前原市教育委員会 2002年
- 『荻浦の文化財』前原市荻浦地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査の速報Ⅰ 前原市教育委員会 1992



- 1：多久遺跡群 2：多久遺跡群D地点 3：多久I木古墳群 4：多久元多久遺跡 5：多久特原遺跡 6：奈良尾遺跡
 7：井ノ浦古墳 8：辻ノ田古墳群 9：萩浦遺跡 10：大浦遺跡群 11：上郷子遺跡 12：篠原遺跡群 13：香力古墳群
 14：潤遺跡群 15：潤地頭船遺跡 16：志登遺跡群 17：御道具山古墳 18：泊大塚古墳 19：泊カツラギ遺跡
 20：東二塚古墳 21：東遺跡群 22：林崎古墳 23：日明古墳群 24：長嶽山古墳群 25：富山神籠石 26：曾根遺跡群
 27：平原遺跡 28：三雲・井原遺跡 29：怡土城跡 30：楠田寺跡 ★印は奈良時代火葬墓

第1図 多久遺跡群の位置及び周辺の遺跡分布図 (1/50,000)

第三章 調査の概要

1. A地点の調査

1) 調査の概要

A地点は開発区域の北東部の尾根で、多久口木古墳群の存在する尾根に対し谷部を挟んで西側にあたる。標高47.2mを頂点とし、なだらかなやせ尾根が東西に25mほど延びている。遺構の有無を確認するため全面表土を剥ぎ、尾根沿いおよび直交方向を中心にトレンチを設定しながら約440㎡について遺構検出を行った。全体に明褐色粘質土（地山）上に10～30cmの暗茶灰色粘質土層および暗茶色粘質土層が堆積している状態で、若干の遺物を包含していた。遺構の分布密度は低かったが、調査区東部隅でピット群を、西部で土坑1基を検出した。

また、表土直下の包含層から、弥生土器、土師器片が数点出土した。

2) 遺構と遺物（第3・4図）

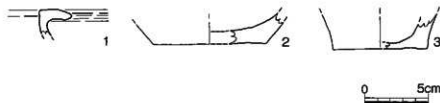
調査区東部隅で直径30～40cm、深さ10～20cmのピット群8基を検出した。建物として想定されるものではないが、調査区北東側へ続いているものと思われる。共伴遺物が無く時期は不明である。

調査区西部隅で東西2.9m×南北2.2m、中央部分が二段掘りになっている歪な円形状の土坑1基を検出した。埋土は淡黒色粘質土で深さ約30cmである。共伴遺物が無く時期は不明である。

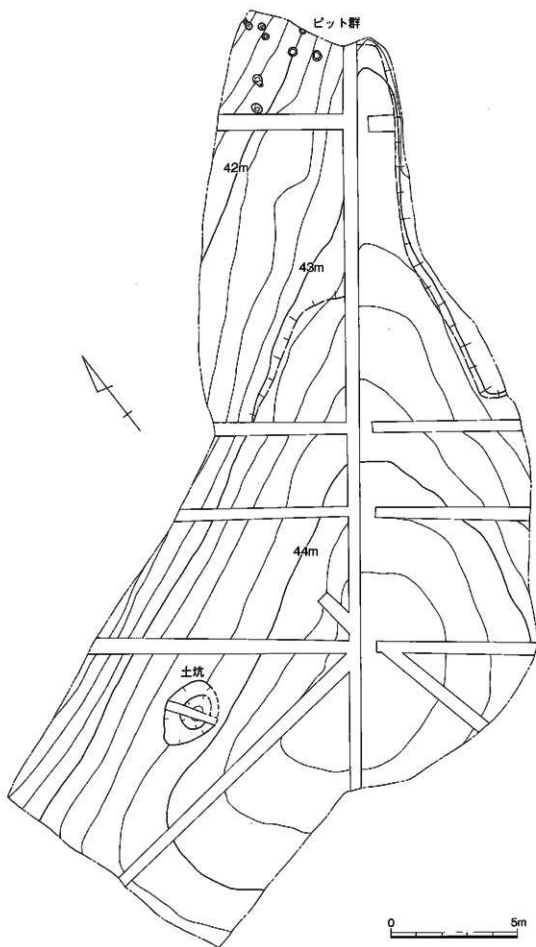
遺物は表土下の包含層から数点出土したが、図示できるものは以下の弥生土器3点である。1は甕の口縁部片で残存高は2.0cm。口縁端部がやや垂れる。茶褐色を呈する。2は甕の底部片で底径（復元）は8.8cmである。3は甕の底部片で底径（復元）は7.4cmである。1～3のいずれも風化が著しい。

なお、A地点東側（多久口木古墳群から約100m南）では故意に寄せられた大小の石があった。古墳の石室に使用された可能性があるため周辺の表土を剥いでその確認にあたった。

地元住民の話によれば、前原料金所南側の旧牛舎を建築する際に、A地点から続く尾根を重機により大規模に掘削しており、その時に土中から出てきたものをブルドーザーにより寄せ集めたものらしい。中には意識的に面を作り出したと思われる石材も見られ、かつては多久口木古墳群と一連の尾根であったことから、本来は古墳が存在していたことも想定されよう。



第3図 出土遺物実測図（1/3）



第4図 A地点全体図 (1/150)

2. C地点の調査

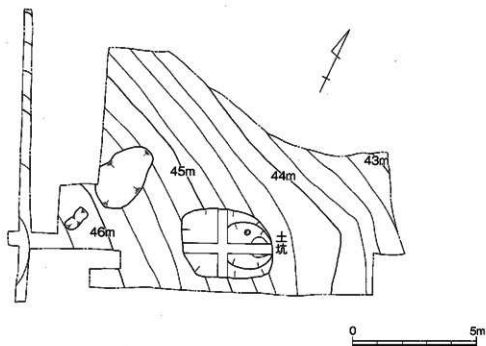
1) 調査の概要

C地点は開発区域の西側に位置し、南北に貫通している市道多久富線に面する丘陵で、A地点との間には南北に谷が湾入している。丘陵頂部および北へ延びる尾根上の大半は緑地のまま現況保存されるため、東に延びる標高43～47.6mの尾根上にトレンチを設定し、土坑が確認された箇所を中心に99㎡を対象として調査を実施した。

2) 遺構 (第5図)

調査区中央の標高45m地点において、表土および淡黄褐色土層の下から、東西3.7m×南北2.7mの土坑を検出した。土坑の東寄りに深さ20cmの淡灰色粘質土埋土の掘り込みがあり、この掘り込みが埋まった後、窪み状になっていたところに二次堆積として灰黑色粘質土が覆っていた。遺物は出土しておらず時期や性格は不明である。

なお、調査区西側の丘陵頂部から1mほど下った地点において、表土下から炉壁のような土の塊が数点出土した。しかし、火を受けた確かな痕跡は認められず、周辺から関連のある遺構も検出されておらず、性格は不明である。



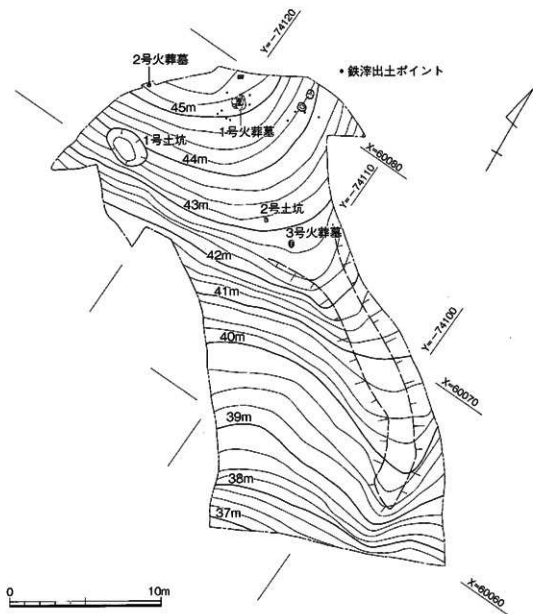
第5図 C地点全体図 (1/150)

3. D地点の調査

1) 調査の概要

D地点は開発地域の西端に位置し、C地点から西に約50mの地点にあたる。頂部標高46.1mの丘陵部のうち法面補強工事の対象となる南斜面について調査を実施した。本調査区の周辺では絶滅が危惧される植物「ナギラン」の生殖が確認されたことにより、その移植による保護と樹木の伐採の関係上、試掘調査は最後に回され1月の着手となった。

当初は頂上部および周辺部における遺構の有無を確認するため、南斜面約90㎡を人力により掘り下げた。そこで、小石室を持つ1号火葬墓および素掘りのピットに埋葬された2号火葬墓、1号土坑等を検出し調査を行ったが、さらに南に火葬墓群が続くことが想定されたため、限られた調査期間ではあったが、調査区を南に拡張するため再度樹木の伐採を行い、重機により約400㎡拡張した。



第6図 D地点全体図 (1/250)

2) 遺構と遺物

① 1号火葬墓 (図版5-1-6-2, 第7図)

丘陵頂部から南にわずかに下った、標高約45mの地点に位置する。手掘りにより表土および暗茶色粘質土層(堆積土)を剥いでいる段階で石組を検出したため、周辺の樹木の根を除去しながら遺構全体の検出を行った。

遺構は天井石、側石、床石を備えた小石室であり、主軸はN-22°-Wを測る。掘形は推定で南北1.04×東西0.95m、深さ20cmで、そこに長さ47~60cmの側石を北→東→南→西と順に立てている。空間が生じた箇所には適当な大きさの石を配置して塞いでいる。天井石は2枚からなり、厚さ9~12cm程の比較的平たい石を用いている。小石室内は南北0.55×東西0.35mで7枚の床石を地山上に並べているが、南側には一部空白地帯が存在する。

石室内には4つの骨蔵器が埋納されていた(①長頸壺+須恵器蓋、②上師器碗+土師器蓋、③須恵器杯身+杯蓋、④須恵器杯身+杯蓋)。すべての骨蔵器で火葬骨の存在を確認できたが、骨蔵器①・③・④内の火葬骨の残存状況は極めて悪い。骨蔵器②については多くの火葬骨を採取することができたが、図版11-6に示すとおり、1cm以下の破片が大半で、まさに木端微塵という印象を受ける。

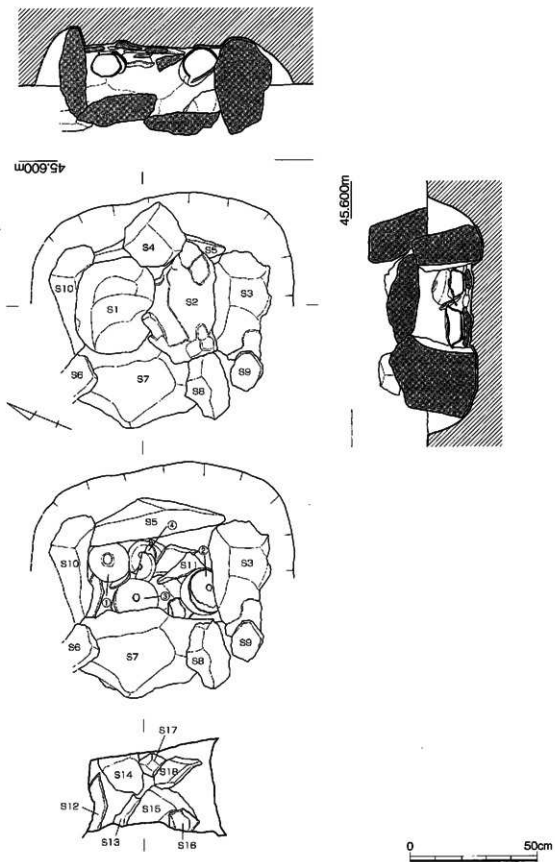
埋納の状況を見ると、骨蔵器①の蓋が骨蔵器③との間にピッタリと挟まっており、後にずり落ちたものではなく当初から落ちていた蓋を立てて骨蔵器③により意図的に支えた形跡がうかがえる。また骨蔵器②は根による若干のズレは考慮されるが、明らかに傾きが大きく、さらにS11(本来床石だったものか)により固定されている。こうしたことから、骨蔵器③・④を納めるために、先に埋納されていた骨蔵器①・②を南北の端に寄せることで中央に空間を設けた印象を受ける。土器型式からも時期は大きく二期に区分され、これに矛盾しないと思われる。なお、石室内への副葬品は確認されなかったが、1号火葬墓周辺から13点、1号火葬墓東側の斜面から4点、計17点の鉄滓が出土した。

骨蔵器① (図版9-1-9-3, 第8図)

〈長頸壺〉 器高12.6cm、胴最大径17.1cmで頸部以上を打ち欠く。焼成が甘く暗褐色で赤焼状を呈している。高台はハの字状を呈するもので高台径11.3cm、高台高0.9cmを測る。胴部上位に最大径を有する。肩部と胴部の境は丸みを帯び、上半にカキ目を施しており7世紀代の特徴を残している。〈小型蓋〉 口径10.9cm、器高1.2cmで外面は黒灰色、内面は淡灰色を呈する。焼成は堅緻。体部は回転ナアにより仕上げているが天井部は未調整で粘土帯の痕跡が明瞭に残る。天井部は低く平坦で、口縁部はやや外に開き端部は丸く仕上げる。小型壺用の蓋を転用している。

骨蔵器② (図版9-4-9-6, 第8図)

〈上師器碗〉 口径18.0cm、器高8.6cm。淡赤橙色を呈する。胎土は非常に精緻で、外面上半部に丁寧なヘラミガキを施した精製品である。底部は径10.3cmで平底を呈し無高台である。底部から丸みを帯びて立ち上がり、口縁部を内傾させて端部を丸くおさめている。大宰府では、大宰府史跡第43次調査(観世音寺大房跡)SK1106や第92次調査SX2670などから、平底で外面をヘラミガキ調整した土師器鉢が出土しており、いずれも8世紀前半に位置づけられている。SX2670については地鎮遺構とされ、土師器については「特別の役割のもとにつくられた可能性」が指摘されているものである。



第7图 1号火葬墓实测图(1/15)

〈土師器蓋〉 口縁部16.2cm、器高2.2cmが残存しているが、風化により端部の大半は欠損している。本来は身と同じもしくは大きい径であったと思われる。頂部に径3.1cmのつまみを有する。色調はにぶい橙色を呈し、焼成は軟質である。

骨蔵器③ (図版10-1~10-3, 第8図)

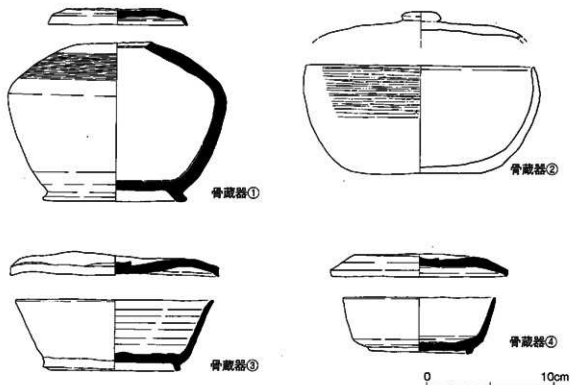
〈杯身〉 口径15.6cm、器高5.6cmと大型である。淡灰褐色で焼成良好。体部はほぼ直線的に延び、立ち上がりも大きくは開かないが、口縁部近くでわずかに外反する。体部の丁寧なナデに対し、高台の貼付け・調整は甘く不均等であるが、高台端部の立ち上げを意識している。底部は未調整で粘土紐の痕跡が残る。

〈杯蓋〉 口径16.4cm、器高1.9cmの大型品。暗灰色で胎土中わずかに石英を含む。激しく焼け歪んでいるが、天井部は低いと思われる。口縁部は垂直に屈曲し、端部は丸く仕上げている。口唇部はわずかに凹む。頂部には径2.5cmの扁平な擬宝珠様のつまみがつく。

骨蔵器④ (図版10-4~10-6, 第8図)

〈杯身〉 口径12.0cm、器高4.5cm。淡灰色で焼成堅緻。体部はわずかに内湾しながら直線的に延びる。体部と底部の境界は丸みを帯びる。高台は底端部よりやや内側に貼付け、端部はほぼ平面を呈するが内側で接地する。底部外面は未調整。

〈杯蓋〉 口径13.8cm、器高1.8cm。丁寧にケズリを施す。天井部は焼け歪んでいるが平坦で体部との境は明瞭である。口縁部は垂直で端部は丸く仕上げている。頂部には径3.0cmの扁平な擬宝珠様のつまみがつく。



第8図 1号火葬墓骨蔵器実測図(1/3)

②2号火葬墓（図版7-1，第9図）

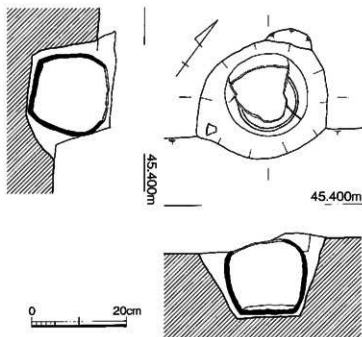
丘陵頂部より東南に下った標高約45mの地点に位置する。1号火葬墓から西に5.5m程離れているが、標高はほぼ同じである。調査区境から攪乱された状態で骨蔵器蓋片が出土したため、一部調査区を拡張して遺構検出を行った。

遺構は径27cm程の素掘りの円形土坑に、須恵器壺を骨蔵器として埋納したものである。表土下の淡褐色粘質土層から骨蔵器の大きさに合わせて掘り込んでいる。埋土は黒茶色粘質土である。蓋は須恵器杯蓋で、攪乱により10片に分かれ一部欠損しているが、ほぼ完形に復元できた。壺は頸以上を打ち欠いたもので、土坑中央に正置されているが若干南に傾いている。

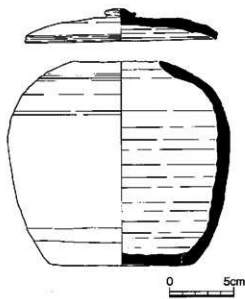
骨蔵器（図版11-1～3，第10図）

〈壺〉 打ち欠き口径6.8cm、器高16.2cm、底径11.5cm。焼成は良好で淡灰色を呈する。胎土は精緻である。肩部に2条の沈線、その下胴最大径付近に1～2条の沈線が廻る。底部から下の沈線あたりまで回転ヘラケズリの後回転ナデにより調整している。底部は平底で貼り付け痕が残る。

〈杯蓋〉 口径15.1cm、器高2.6cm。焼成は甘く軟質で淡灰褐色を呈する。口縁部はほぼ垂直で口唇部はわずかに凹む。頂部には径2.5cmの擬宝珠様のつまみをつける。このつまみは1号火葬墓出土骨蔵器③・④のつまみが扁平であるのに対し、やや高く0.7cmを測る。



第9図 2号火葬墓実測図（1/8）



第10図 2号火葬墓骨蔵器実測図（1/3）

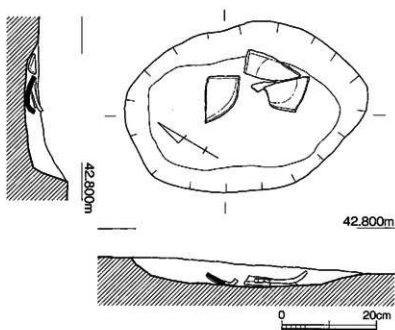
③3号火葬墓(図版7-2,第11図)
丘陵南斜面の尾根上、標高42.7mの地点に位置する。1号火葬墓からは距離にして10m程東南に当たる。本来なら手掘りにより火葬墓の範囲確認を実施すべきであったが、標高44m付近以下は調査期限終了間近であったため、樹木伐採後にやむなく重機による表土剥ぎを実施した。その際、3号火葬墓を検出したが、上部は重機による削平を受けている。

遺構は0.5×0.33mの楕円形の掘形を呈し、深さ5cmが残存していた。主軸はN-40°-Wである。土坑床面はほぼ水平である。骨蔵器が土坑の東に寄っていることから、掘削時の影響で現位置を保っていない可能性があるが、骨蔵器底部には火葬骨が良好に残存していた。

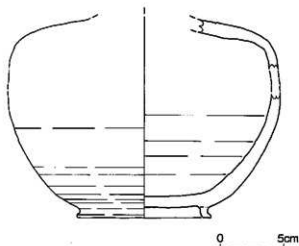
骨蔵器(図版11-4,第12図)

肩部および胴下半~底部のみ残存している。復元で肩部径20.2cm、胴最大径21.4cmである。外面は淡橙色、内面は浅黄橙色を呈し焼成は甘く軟質である。胴下半は底部から丸みを帯びて立ち上がる。外面は回転ヘラケズリ後に回転ナダを施しており、須恵器のような成形である。底部には径10.6cm、高さ0.9cmのハの字状に開く高台を貼り付けている。高台端部は丸く仕上げ、接地部は平坦面を有し全面で接地している。肩~胴部にかけては90度近く屈曲する。

時期については明確ではないが、肩が張ることや高台の形態などから他の火葬墓と時期的にそう大差ない頃と推定される。



第11図 3号火葬墓実測図(1/8)



第12図 3号火葬墓骨蔵器実測図(1/3)

③ 1号土坑 (第13図)

標高約44m、調査区西端で検出した。東西2.75m、南北2.1mの楕円形を呈する。床面は平坦面を有し、緩やかに立ち上がる。埋土は淡黒色粘質土で、土師器の小片が出土したが時期が特定できる遺物はない。

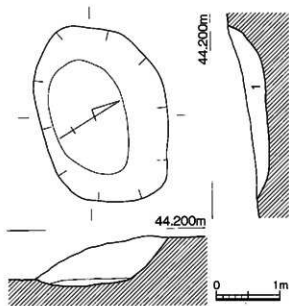
④ 2号土坑 (図版8-1, 第14図)

標高約43m、3号火葬墓から西へ約2mの地点で検出土した。南北27.9cm、東西21cmの歪な楕円形の掘形で、床面はほぼ水平である。土坑内からは口縁部を下に向けて置いた甕状の土器が出土したが、3号火葬墓と同様に検出時に重機により削平しており残存状況は極めて悪い。

火葬骨が存在しなかったため確証はないが、同一尾根上に位置することや、土器を伏せていたことから火葬墓関連遺構としての可能性も残っている。

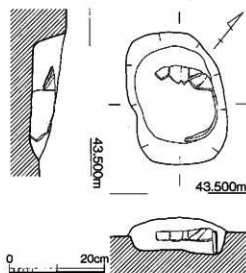
出土遺物 (図版11-5, 第15図)

復元口径19.0cm、残存高3.6cmで淡褐色を呈する。少量の石英・長石を含み焼成は甘い。口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、内面端部をやや細めに仕上げているためわずかに稜が生じている。内外面とも磨滅が著しい。

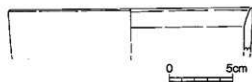


1. 淡黒色粘質土

第13図 1号土坑実測図 (1/60)




















第14図 2号土坑実測図 (1/8)



第15図 2号土坑出土土器実測図 (1/3)

⑥ 1号火葬墓周辺出土鉄滓 (図版12、第16・17図)

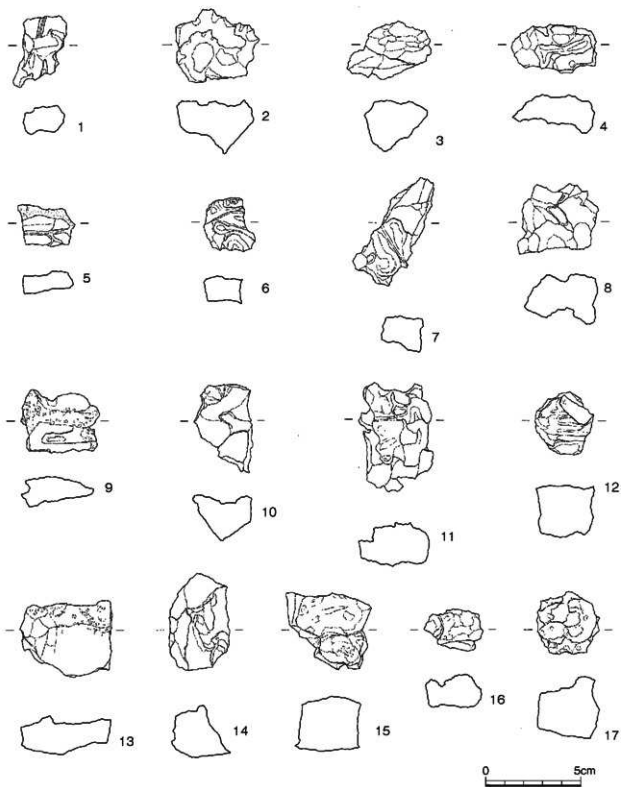
炉壁 (製鉄滓)	炉壁 (通風孔周辺)	炉壁 (炉内滓付き)	流動滓	炉内滓 (炉壁付き)	炉内滓 (流出孔滓の可能性ある)	炉内滓 (含鉄・メタル炭酸化△)
 1. 12g - 2	 3. 27g - 2	 5. 9g - 2	 9. 37g - 2	 12. 30g - 5	 14. 68g - 2	 16. 13g - 3
 6. 12g - 3	 7. 35g - 3	 10. 57g - 2	 11. 74g - 2	 15. 91g - 2	 17. 48g - 4	
 2. 35g - 2	 4. 23g - 3	 8. 39g - 2	 13. 51g - 2			

昭和40年池田山遺跡一層出土品

第16図 鉄滓構成図 (1/3)

出土した鉄滓はすべて製鉄に伴う製錬滓で、炉壁8点、流動滓3点、炉内滓6点である。これらは穴澤義功氏に実現いただき以下のような見解をいただいた。

特徴として小型の箱型炉と想定されること、結晶の発達から7世紀代に遡る可能性があること、チタンの少ない砂鉄もしくは鉄鉱石を原料としていることが挙げられる。



第17図 鉄滓実測図 (1/2)

第IV章 まとめ

一市内火葬墓の出土例一

わが国における火葬墓の歴史については、700年に僧・道昭が火葬されたのが国内での初現で、703年の持統天皇の火葬以降、中央の天皇・貴族を中心に導入され次第に地方の郡司・有力家族・僧侶等の間に広がったものとされている。市内における奈良時代の火葬墓としては、これまでに荻浦遺跡群で4点、大浦遺跡群で5点、調地頭給遺跡Ⅰ区で1点の骨蔵器が出土している。今回検出した多久遺跡群D地点の3基の火葬墓群とあわせて、いずれも8世紀前葉から中葉（一部後葉含む）に造営されたものである。このことは全国的にも早い段階で火葬墓が導入された例として重要な意味を持ち、特に多久河流域における奈良時代の先進性は注目に値する。

火葬墓の立地について

多久河流域で検出されている多久遺跡群D地点・荻浦遺跡群・大浦遺跡群における奈良時代の火葬墓は、いずれもその立地に関しては丘陵の南斜面が選ばれている。このことは、それぞれの集落単位で、生活空間を見渡すことができる場所を選んだ可能性もあるだろうが、多久遺跡群D地点においては火葬墓群の南側はかつて東西に谷が湧入しており、必ずしも集落域が眼前に広がるものではないようだ。もし、すでに指摘されているように（下原2006）、いわゆる「風水」的な側面から望む場所として敢えて「南斜面」を選んでいるとすれば、火葬墓導入の背景に精神的な風習がうかがえ興味深い傾向である。

	遺跡名	地点	遺構名	骨蔵器の器種	時期	備考
1	多久遺跡群	D地点	1号火葬墓	須恵器長頸壺+須恵器壺蓋	8世紀前葉	本報告
2	多久遺跡群	D地点	1号火葬墓	土師器碗+土師器壺	8世紀前葉	本報告
3	多久遺跡群	D地点	1号火葬墓	須恵器杯身(大)+須恵器杯蓋	8世紀中葉	本報告
4	多久遺跡群	D地点	1号火葬墓	須恵器杯身(中)+須恵器杯蓋	8世紀中葉	本報告
5	多久遺跡群	D地点	2号火葬墓	須恵器壺+須恵器杯蓋	8世紀前葉	本報告
6	多久遺跡群	D地点	3号火葬墓	土師器壺 壺蓋は不明	8世紀前~中葉	本報告
7	荻浦遺跡	市園地区	—	須恵器長頸壺+須恵器杯蓋	8世紀前~中葉	岡部1992
8	荻浦遺跡	立石地区	—	須恵器短頸壺+須恵器杯蓋	8世紀前~中葉	岡部1992
9	荻浦遺跡	立石地区	—	須恵器杯身+須恵器杯蓋	8世紀前~中葉	岡部1992
10	荻浦遺跡	立石地区	—	須恵器長頸壺(骨蔵器?)	8世紀前~中葉	岡部1992
11	大浦遺跡群	E地点	—	須恵器短頸壺+須恵器短頸壺蓋	8世紀中葉	川村1987
12	大浦遺跡群	E地点	—	須恵器長頸壺+須恵器杯身	8世紀中葉	川村1987
13	調地頭給遺跡	Ⅰ区	—	須恵器甗	8世紀前~中葉	未報告

表1 市内火葬墓出土例

—多久遺跡群D地点の火葬墓の構造と被葬者像—

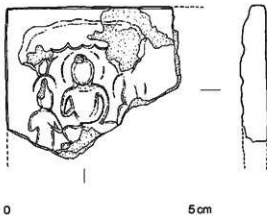
1号火葬墓については、小石室内に複数の骨蔵器を埋納するという、極めて稀なケースの火葬墓といえる。これまでに石囲い中に二つの骨蔵器を埋納する例は、川崎市瀬見台遺跡やつくば市東岡遺跡等で確認されていたが、四つの骨蔵器となると全国でも例がない。さらに今回の1号火葬墓は石囲いではなく、天井石、側石、床石を備えたまるで古墳のミニチュアのような形態である。先に述べたようにまず骨蔵器①・②が埋納され、その後骨蔵器③・④が埋納されたとすれば、まさに7世紀代のいわゆる終末期古墳における「追葬」の概念を継承した、薄葬傾向の究極の形態と言えよう。また、その時期に散見される小型石室の性格を知る手がかりになるかも知れない。

一方、2号火葬墓については土器型式から8世紀前葉、3号火葬墓も8世紀中葉までには造営されたと思われるが、これらは1号火葬墓が小石室を持つのに対し、一つの骨蔵器が埋納できる程度の大きさの素掘りの穴に直接埋納したものであり、1号火葬墓と2・3号火葬墓には歴然とした扱いの違いが認められる。1号火葬墓は例えば直系男性、2・3号火葬墓は直系女性あるいは傍系に属す人物といった系統の差が存在した可能性がある。1号火葬墓は複数人の埋納を想定して造られた感が有り、当初からそこに埋納される人物はあらかじめ決められていたのかも知れない。

ではこの火葬墓群にはどんな人物が埋納されたのか。それは恐らく多久川流域における有力氏族であると思われるが、北東に位置する多久口木古墳群とは、直接的な首長層の系譜をたどるには立地的にも時期的にもやや開きがあり関係が希薄であると言わざるを得ない。また市内においては、現在までに古代寺院や官衙遺構の明確な発見例はなく、仏教関係者や役人としての被葬者像を求めることは難しい。ただし、近接する奈良尾遺跡において、整地層より「埴仏」(第18図)が出土していることは注目すべき事実で、古代寺院や官衙跡は未確認ながら、周辺に何らかの仏教関連遺構及び仏教に関わる人々が存在したことを否定するものではない。さらに、低丘陵を二つ西へ隔てた先には奈良時代に清賀上人により開基されたとされる「怡土七ヶ寺」のうちの一つ、「種宝山補田寺」跡が今に伝わり、この一帯に仏教が根付いていたことがうかがわれる。

なお、1号火葬墓周辺から出土した17点の製錬滓について、これらは直接火葬墓へ副葬されたものではないが、近くに製鉄関連遺構はなく、また古墳に供献されたものが流出したとも考えられない。何らかの意図によりこへ持ち込まれたものとすれば、最も近接している1号火葬墓の被葬者に関連するものである可能性が高いのではないだろうか。

以上のことから、被葬者については現況では多久川流域で活躍した有力氏族の氏墓の性格を持つものと推定しているが、今後の発掘調査等により周辺の様相がさらに詳しく解明できれば、将来的にはより具体的な被葬者像として捉えられるものと考ええる。いずれにせよ今回出土した火葬墓群は、古墳時代から律令時代への社会的変革期にあたるこの時期において、地方における終末期古墳から火葬墓への変遷の様相を知る上で貴重な成果となったといえよう。



第18図 奈良尾遺跡出土埴仏実測図(1/1)
[奈良尾遺跡] 福岡県教育委員会1991より転載

一火葬墓導入の背景一

ここで、8世紀頃の糸島地域がどのような様相であったのか、簡単に概略をまとめておきたい。

まず、九州大学移転（伊都キャンパスの造成）に伴い平成8年度より福岡市教育委員会が実施している福岡市西区の元岡・桑原遺跡群の発掘調査では、木簡・墨書土器・硯・帯金具、掘建柱建物群・製鉄遺構など数々の奈良時代の遺構・遺物が発見されており、糸島半島東部における嶋郡の様相が明らかになりつつある。その中で、第20次調査では、「大寶元年」（701年）銘の木簡が出土しており、官僚機構が整い始めたばかりの時期における嶋郡と大宰府との強い関連性を示し、律令制度が極めて短期間にこの地へ浸透していたことを物語っている。

また、志摩町八熊遺跡や先の元岡・桑原遺跡群をはじめとして、糸島半島からは奈良時代の製鉄関連遺構が数多く検出されている。これら製鉄遺跡が全盛期を迎えるのは8世紀後半であるが、元岡・桑原遺跡群内の石ヶ元12号墳から6世紀中頃の鍛冶関連遺物が出土したこと、また第7次調査出土「壬申年韓鐵」銘木簡の壬申年が持統6（692）年と推定されていることなどから、その始まりは8世紀以前に遡る可能性が指摘できる。その背景として、わが国が新羅・唐との緊迫した外交関係を直面し、大宰府直轄による官営工房により多量の武器生産の拠点として製鉄が営まれていたものと考えられるが、かつて602年に来目皇子が2万5千の兵を率いて嶋郡に駐留したことからも、この地が軍事上非常に重要な地域であったといえる。

さて、製鉄活動がピークを迎える頃、時を同じくして始まったのが怡土城築城である。怡土城は現在の前原市と福岡市の境に位置する標高416mの高祖山西斜面を利用し、吉備真備が指揮を執り756年に築城を開始した。途中佐伯今毛人へと指揮官が交代し、実に12年の歳月を経て768年に完成をみたもので、強固な土塁や複数の望楼を備え国防の最前線としての役割を担った。

以上のように、怡土郡・嶋郡の8世紀の動向はいずれも大宰府と密接な関係をもっていることは言うまでもない。その大宰府と糸島の太いパイプを考えれば、早い段階で火葬墓がこの地に導入されたことは全く自然なことである。しかし一方で、現存するわが国最古の戸籍として知られる大宝2（702）年の『筑前国嶋郡川辺里戸籍』から、当時の嶋郡の郡司であり大領であった「肥君猪手」を筆頭とする肥君一族が大勢力を誇っていたことは明らかであるが、嶋郡では未だ火葬墓は見発見されていない。郡家の所在地に相応しい元岡・桑原遺跡群一帯においてこそ、いち早く導入されていても不思議はない。肥君猪手やその一族は、未調査の丘陵斜面に火葬されて眠っているものと推測している。さて、怡土郡を横断し大宰府へと繋がる古代官道は、多久遺跡群や荻浦遺跡群からそう遠くない場所を通っていたと推定されているが、まだまだ不明なことばかりである。今後の調査によりこの付近で散見される仏教関連遺構や遺物がいずれ線あるいは面的に明らかになれば、将来的には多久川流域ひいては怡土郡における集落構造が解明されるものと期待したい。

（参考文献）

- 岡部指使『萩浦の文化財』（前原町荻浦地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の速報1）1992 前原町教育委員会
川村博『大浦遺跡群発掘調査概報』前原町文化財調査報告書第26集 1987 前原町教育委員会
下原幸樹『西日本の終末期古墳』2006 中国書店
狭川真一『古代火葬墓の造営とその背景』『古文化談叢』第41集 1998 九州古文化研究会
吉澤悟『火葬墓の出現と広がり』『千葉県歴史資料編考古4（遺跡・遺構・遺物）』2004 財団法人千葉県資料研究財団
渡邊昭宏他『千葉県東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書5』2000 日本道路公団 財団法人千葉県文化財センター
『第5回東日本埋蔵文化財研究会 東日本における奈良・平安時代の墓制一墓制をめぐる諸問題一』第1分冊 1995 務本原考古学会誌

写 真 图 版



1-1 多久遺跡群遠景（北から）



1-2 多久遺跡群遠景 D地点撮影前（南から）



2-1 A地点全景（東から）



2-2 A地点東側 集石（東から）



3-1 C地点全景（東から）



3-2 拡張後のD地点遠景（南から）



4-1 D地点からの眺望（北から）



4-2 1・2号火葬墓（南から）



5-1 1号火葬墓検出状況（南から）



5-2 1号火葬墓骨蔵器出土状況（北東から）



6-1 1号火葬墓骨蔵器出土状況（東から）



6-2 1号火葬墓基石検出状況（南から）



7-1 2号火葬墓(南から)



7-2 3号火葬墓(東から)



8-1 2号土坑 (南から)



8-2 造成進むD地点 (南から)



9-1 D地点1号火葬墓骨藏器①



9-2 D地点1号火葬墓骨藏器①盖



9-3 D地点1号火葬墓骨藏器①身



9-4 D地点1号火葬墓骨藏器②



9-5 D地点1号火葬墓骨藏器②盖



9-6 D地点1号火葬墓骨藏器②身



10-1 D地点1号火葬墓骨藏器③



10-2 D地点1号火葬墓骨藏器③盖



10-3 D地点1号火葬墓骨藏器③身



10-4 D地点1号火葬墓骨藏器④



10-5 D地点1号火葬墓骨藏器④盖



10-6 D地点1号火葬墓骨藏器④身



11-1 D地点2号火葬墓骨藏器



11-2 D地点2号火葬墓骨藏器 盖



11-3 D地点2号火葬墓骨藏器 身



11-4 D地点3号火葬墓骨藏器



11-5 D地点2号土坑出土土器



11-6 D地点1号火葬墓骨藏器② 火葬骨

図版12

NO.1



NO.2



NO.3



NO.4



NO.5



NO.6



NO.7



NO.8



NO.9



NO.10



NO.11



NO.12



NO.13



NO.14



NO.15



NO.16



NO.17



NO.1~NO.8
炉壁

NO.9~NO.11
流動滓

NO.12~NO.17
炉内滓

D地点1号火葬墓周辺出土鉄滓

報 告 書 抄 録

ふりがな	たくいせきぐん							
書名	多久遺跡群							
副書名	前原IC地区A産業団地整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	前原市文化財報告書							
シリーズ番号	第99集							
編著者名	梢崎直子							
編集機関	前原市教育委員会							
所在地	〒819-1192 福岡県前原市前原西一丁目1番1号							
発行年月日	2008年3月31日							
保管場所	【写真】【遺物】【図版】					伊都国歴史博物館		
保管場所所在地	〒819-1582 福岡県前原市大字井原916 TEL 092-322-7083							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
多久遺跡群	福岡県前原市大字 多久・富 地内	40222		33°32'08" 16"	130°12'15" 17"	20070118 20070326	930m ²	産業団地 整備
	墓地							
				火葬墓・土坑		骨蔵器・鉄滓		

多久遺跡群

前原IC地区A産業団地整備事業に伴う文化財調査報告書

前原市文化財調査報告書 第99集

2008年3月31日

発行 前原市教育委員会

福岡県前原市前原西一丁目1番1号

TEL 092 - 323 - 1111

印刷 瞬報社写真印刷株式会社 九州支店

福岡県福岡市中央区天神5丁目4番16号城戸ビル3F

TEL 092 - 712 - 2241

